

垂水市大野地区における地域振興計画づくり

垂水市企画課職員 岩元卓史

1. はじめに

鹿児島大学と垂水市が本市の地域づくりに関して連携を始めたのが、2005年2月であった。2006年10月には、「垂水市と鹿児島大学との第4次垂水市総合計画策定に関する協定」を締結し、2008年度から10年間の第4次垂水市総合計画を鹿児島大学との連携により策定する事となった。これまでの本市の総合計画策定については、コンサルタント会社へ委託する部分が多かったが、この第4次垂水市総合計画については、鹿児島大学公開講座を活用する事による、市民と市職員の手作りによる計画策定を目指し、策定のための公開講座を20回開催し、その参加人数はのべ835人にのぼった。第4次垂水市総合計画策定に至るまでの鹿児島大学公開講座の内容については、鹿児島大学生涯学習教育研究センター年報第5号(2008年10月発行)において、「第4次垂水市総合計画と鹿児島大学公開講座／堀留 豊」で報告している。

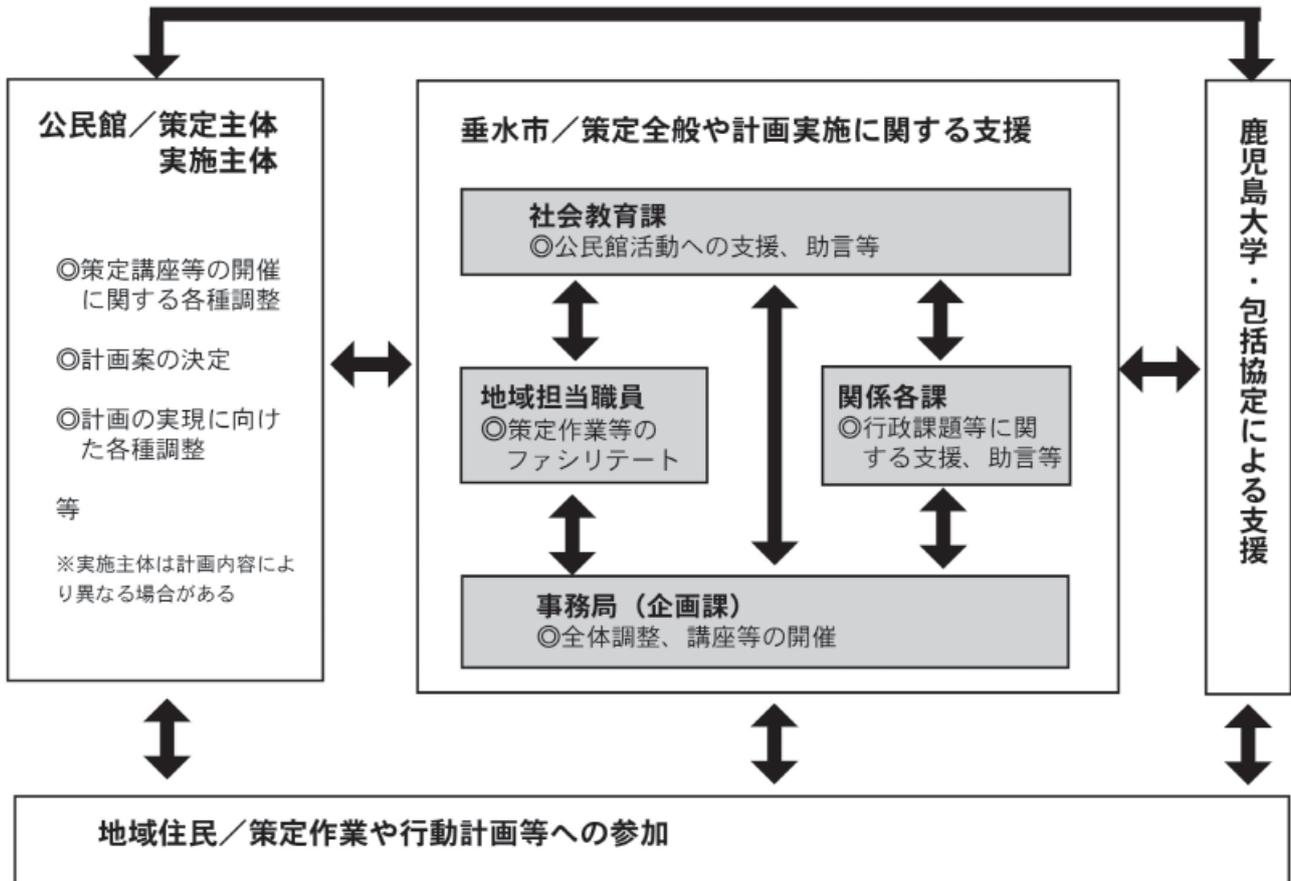
このようにして策定された第4次垂水市総合計画において、基本構想として第1章「基本構想の目的」、第2章「まちづくりの基本理念と将来像」、第3章「将来指標」、第4章「地域づくりの考え方」、第5章「施策の大綱」を定めた。この中で、第4章「地域づくりの考え方」第1節「地域拠点地区の定義」において、垂水市内9小学校区に設置されている地区公民館を地域づくりの拠点地区として位置づけ、第2節において各地域拠点地区において、地域づくりの考え方や地域の将来像を盛り込んだ「地域振興計画」を定めて、各地域の特性を生かしたまちづくりを地域住民の手で進める事とした。

2. 地域振興計画策定モデル地区の選定

私は2008年10月の定期人事異動により企画課地域政策係に配属され、この地域振興計画策定に携わる事となった訳であるが、当初は何から始めればよいか分からなかった。何故なら、この地域振興計画策定が本市では初めてのことであり、市内各地区においても認識がそれほど高くな

く、また市職員の中での認識も同様に高くなかったからである。本市にとって初めての試みであり、事業実施のためのノウハウも持ち合わせていなかった事から、鹿児島大学生涯学習教育研究センター小栗有子准教授にご相談させて頂いたところ、垂水市内9地区において一斉に地域振興計画策定に取り掛かるのでは、どの地区においても策定作業が中途半端なものになってしまう恐れがあるため、9地区の内1地区を地域振興計画策定のモデル地区として定め、1年かけてモデル地区での計画策定作業を行い、その結果・反省を踏まえて次年度以降市内他地区での計画策定作業へ移行していく事となった。

モデル地区の選定をするにあたり、「地域住民の地域づくりの意識が高い」・「地域住民のつながりが強い」・「なるべく小規模な地域の方が良い」事を選定の条件とした。この条件の対象地区について企画課内で検討したところ、大野地区がモデル地区にふさわしいのではとの結論に至った。大野地区は平成21年4月時点で62世帯145人の住民の方々が暮らす山あいに位置する小さな地区であり、小さなコミュニティである事から地域住民のつながりも強く、市内他地区に比べ住民間の連帯意識が強いと思われる地区である。また、平成18年3月をもって廃校となった垂水市立大野小中学校の施設を、鹿児島大学と連携し「大野ESD自然学校」として活用していた事も、大野地区をモデル地区として選定する大きな理由となった。大野ESD自然学校については、鹿児島大学生涯学習教育研究センター年報第6号(2009年10月発行)において、「大野ESD自然学校が作り出す多様な学び／羽生 文彦」で報告している。このようにして企画課内で大野地区をモデル地区として選定する意向を固めた訳であるが、大野地区をモデル地区としたい理由及び平成21年度に大野地区地域振興計画を策定していきたい旨、大野地区公民館長及び主事へご説明させて頂き了承を得た。また、このことを垂水市全課長で構成される庁議でも報告し、全庁的な支援のもと下図のような体制で大野地区地域振興計画を策定していくことが了承された。



以上のことについて、平成21年5月に開催された垂水市地区公民館連絡協議会において、市内9地区の公民館長及び主事へ報告し、実際に策定作業を行っていきこととなったわけである。

3. 大野地区での住民説明会

これを受け再度大野地区公民館長及び主事と打ち合わせを行い、平成21年8月に開催された大野地区公民館運営委員会において、地域振興計画の説明及び大野地区をモデル地区として選定したことを公民館運営委員に説明した。地域住民によるまちづくり計画の策定といっても、何から手をつけたらよいか住民の方々は戸惑われるであろうとの事により、鹿児島大学小栗准教授より事前に提供頂いた愛媛県内子町石畳地区の地域づくり計画書を参考資料としてお示ししながら、計画書のイメージを掴んで頂いた。しかし、行政主導ではなく地域住民によるまちづくり計画としながら、当計画策定の呼びかけを行政が行っていることに公民館運営委員の方々も戸惑われているようで、「地域住民は現状の生活で精一杯であり、地域活動にも十分すぎる程の

時間を割いている。これ以上の活動は負担になる」といった意見が多く出された。また、「大野地区の計画が策定されその計画を活用する時点では、行政による財政補助があるのか」などの意見も出された。これに対し、ハード面ではなくソフト面に目を向け10年後の大野地区をより良い地域にするために、どのような行動計画が考えられるか、逆に公民館運営委員の方々にお尋ねした。すると驚いたことに皆それぞれにアイデアを持っていらっしまった。例えば、「婦人部の話し合いでは、休耕地にクレソン等を植え最終的には販売できればと談笑している」とか、「大野地区は高齢化が顕著な地域なので、近隣住民による声かけ運動を行って高齢者に優しい町づくりを目指したらどうか」、「大野地区住民にとって高峠つつじヶ丘公園は最大の誇りである。当公園の管理をある程度地域住民に任せてもらえないか」などの意見・アイデアである。そのようなアイデアを各個人が持ち寄り、一つの計画書にまとめ上げることが今回の「地域住民による手作りのまちづくり計画」ではないかと思ひますと呼び掛けたところ、事業について概ねご理解頂いた。そのうえで、地域住民によるまちづくりで

あれば、公民館運営委員だけではなく大野地区全住民に対し説明会を行ってから計画策定作業に入ってはどうかとの意見が出され、大野地区内の2自治会である大野原振興会と垂桜振興会でそれぞれ地域振興計画にかかる住民説明会を実施することとなった。

この結果を鹿児島大学小栗准教授に報告したところ、住民説明会に際してのアドバイスを数点頂いた。まず地域振興計画という名称が堅苦しい表現であり、住民の方々に説明する際には「大野地区のまちづくり計画」などのわかりやすい表現に変えたほうが良いとのことであった。また、大野地区の個性と住民の思いをうまくリンクさせた形での計画書づくりを目指してはどうかということ、また、計画策定作業の第一歩としては住民自ら自分たちの暮らしをチェックする作業を行ってはどうかということであった。小栗准教授のアドバイスを踏まえ住民説明会を開催することとなったわけであるが、全住民参加型の住民説明会という事で振興会の総会という形を取っていただいた。垂桜振興会での住民説明会で出された意見としては、「計画策定作業への高齢者の参加は難しいのでは」、「策定作業といってもまず何から手をつけてよいかわからない」、「大野地区の計画ではあるが大野原振興会、垂桜振興会それぞれで策定作業を行ってはどうか」などの意見が出された。また、大野原振興会住民説明会では「高齢化が進むこの地域においては生産年齢層が地域活動の担い手となっており、これ以上の地域活動への参加は過大な負担となる」、「この事業はやらなければならないのか」などの意見・質問がなされた。策定作業のまず最初の部分については行政側でメニューを組み立てることとし、参加できる方が参加するオープン参加型のメニューとすることで住民の方々から大野地区での地域振興計画策定に了承を得られた。



4. 高齢者座談会

このようにして実際の策定作業に入っていくことになった訳であるが、策定作業については鹿児島大学公開講座を活用することとした。小栗准教授に住民説明会の結果を伝え、策定作業の第一歩としての公開講座開催についてご相談させていただいたところ、高齢者座談会という形でまず最初の策定作業を行ってみてはどうかとの提案がなされた。高齢者の方々に「昔の地域」「昔の生活」に関する聞き取り調査を行い、地域のルーツ・生活のルーツを探り、大野地区地域振興計画策定作業の足がかりとしようという事となった。高齢者の方々を対象としたのにはもうひとつ理由があり、それは普段地域活動参加にあまり積極的ではない高齢者の方々をまず座談会形式の公開講座へお誘いすることにより、今後の策定作業への参加の動機付けとしていただきたいとの狙いがあった。詳細な公開講座のメニューを小栗准教授からご提案頂き、以下のようなメニューで高齢者座談会を11月30日に実施した。

「地域を元気にする献立づくり」 献立づくりにはメニューが必要。

三流の料理人は、そろえたものでまずまずのものをつくる。
二流の料理人は、そろえたものでおいしいものをつくる。
一流の料理人は、あるものでおいしいものをつくる。
一流の料理人を目指し、あるものを皆さんにお伺いしたい。

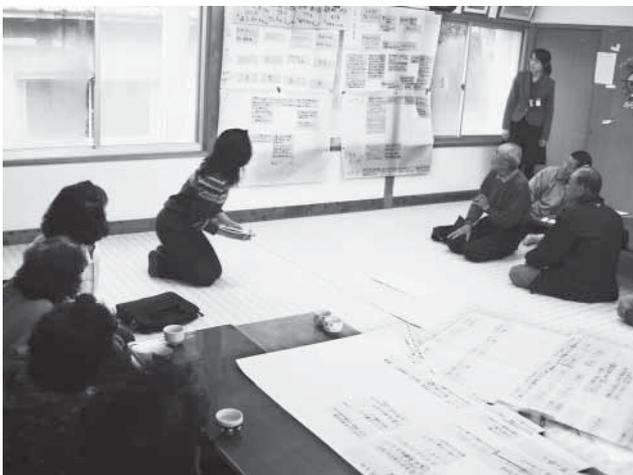
この高齢者座談会には、大野地区高齢者クラブの会員20名の方に参加を頂いた。男女に分かれてもらい、以下のことを聞き取る形で講座を行った。

- 名前と年齢、何と呼ばれているか。
- どこに住んでいるか。(いつからそこに暮らしているか、その前はどこにいたか。)
- 良く集まる場所はどこか、集まって何をするか。
- これまで食べたものの中で一番おいしかったものは。
- 垂桜でとれる食べ物は。(いつとれるか。誰が作っているか。)
- 昔は水をどうやってとってきていたか。(どこから。誰の仕事であったか。とった水を何に使ったか)
- 今は水をどうやってとっているか。
- 昔どのような遊びをやっていたか。(何をしたか。どこでしたか。誰としたか。)

- 遊び道具は自分たちで作ったか。(何を作ったか。材料は何。どうやって作ったか。)
- 今はどんな遊びをしているか。(いつ、どこで、誰と)
- ここで一番好きな場所はどこか。(その理由)
- ここを色に例えると何色か。(その理由)
- ここを季節に例えるといつか。(その理由)

進行役を小栗准教授と私で行い、参加された方々一人一人に上記の質問を行い、その回答を模造紙に付箋紙で張り付けて、最後に進行役によりまとめとして振り返りを行った。講座開始直後は参加者の方々も遠慮気味に質問に答えていたが、講座が進むにつれ地域の昔の姿、自分の生活の昔の姿等を懐かしそうに語られていたのが印象的であった。この公開講座により、大野地区の昔の生活スタイルについて調査結果としてまとめ、今後の大野地区地域振興計画の策定基礎データとして活用していくこととした。

また、この高齢者座談会のつづきとして、鹿児島大学ルネッサンスアカデミーによる大野地区垂桜振興会において「地元学」が平成22年12月5日・6日に開催された。地域外の人間による大野地区のあるもの探しである。ルネッサンスアカデミー受講生が垂桜振興会を歩いて回り、垂桜振興会においてあるもの探しを行い、絵地図などにまとめたものを地域住民に対し発表するというものである。これには、地域住民の方々にとっては当たり前地域に存在するモノも外の人にとっては珍しいモノ、貴重なモノであるということを地域住民の方々に認識して頂きたいとのねらいがあった。ルネッサンスアカデミー受講生には、「大野地区における水のゆくえ」「おじいちゃん・おばあちゃんの一代記」「大野地区の食」「大野地区の民家の庭先に植えてある植物」「農事暦」などを調べて頂き、垂桜振興会住民の方々に対し自分たちが調べたものを絵地図として発表し



て頂いた。このルネッサンスアカデミーにより今後の大野地区地域振興計画策定作業に活用できる資料が増えることとなった。

5. 「村丸ごと生活博物館」現地視察

この高齢者座談会、ルネッサンスアカデミーによる地元学を足がかりとして、地域振興計画策定作業を一気に進めていければ良かったが、地域住民の方々の計画策定作業参加の機運醸成がなかなか図れなかった。これは、地域振興計画策定によるメリットの周知、興味を引くような呼びかけができなかったことなどが理由である。また、当初の予定では平成21年度中に大野地区での計画策定を終了する予定であったが、スケジュール的にも平成21年度中の策定は困難となっていた。企画課内で検討した結果、年度内での計画策定は地域住民に過大な負担を強いることとなるため、大野地区での策定作業を1年間延長し平成22年度末までの策定を目指すことに決まった。このことを小栗准教授にご相談させて頂いたところ、地域住民の方々にまちづくりの先進地を実際に見て頂くのも良いのではとのアドバイスを頂き、視察先を検討した結果、熊本県水俣市頭石地区の現地視察を行うこととした。頭石地区は水俣市から「村丸ごと生活博物館」の認定を受けている地区の一つである。これは、自然、産業、生活文化を守り育てる地区そのものを水俣市が「村まるごと生活博物館」に指定し、指定地区は生活を案内する博物館として、常時受け入れを行っており、また住民の中から「生活学芸員」「生活職人」を認定しているという取組である。この先進地視察を平成22年3月11日に実施することとし、大野地区住民、垂水市内各地区公民館長及び主事へ参加呼びかけをおこなったところ、20名の方の参加を頂いた。題して「水俣市の集落再生と生活丸ごと博物館に学ぶ旅」。水俣市までの道中、小栗准教授による講座の趣旨、水俣市の取組、生活丸ごと博物館についての説明を頂き、現地到着後、頭石地区代表・生活学芸員・生活職人の方々による頭石地区の取組についてのご説明を頂いた。地区内に存在するものにスポットをあて、訪問者に対しわかりやすくユーモアを交えて地区内を案内して回る。それが生活丸ごと博物館であった。地区代表による説明において、地区の地域活性化を図る方法を模索していた時に、水俣市から勧められたのがこの制度であったとの事。当初はこの制度を活用する意義もあまり理解できなかったが、とにかくやってみようとの事により始

めた制度であるとの事。その結果、「案内を通して村の人々が元気になった」「集落内の草が払われるなど集落が綺麗になった」「体験や販売を重ねることでものづくりがすすんだ」などの成果が現れたとのことであった。

この公開講座に参加された方々の感想を聞いてみたところ、「博物館と聞いて何か特別な取組を想像していたが、別に特別なことをしてはいなかった。そこが興味深かった」「とにかくやってみることが大事であると感じた」「地域にあるものを見つめなおすことが大事であると思った」などの意見が出された。むらづくり・まちづくりの先進事例研修を行った事により、参加された方々の意識も相当進化したようであった。



6. 終わりに

平成21年度の「大野地区地域振興計画策定」については以上のとおりであるが、現在引き続き策定作業を行っている。昨年度の取組を振り返り、以下のような反省点があった。まず私自身が計画策定の明確なビジョンを持っていな

かったことにより、住民の方々にも魅力ある呼びかけが出来なかったことである。この計画を作ることにより住民の方々が損をすることはありませんと言い切れる程のビジョンを持つべきであったと猛省している。次に、住民によるまちづくり計画であるため、私が出来るだけ多数の地域住民の方々への計画策定作業参加を求めてしまったことである。とにかくやってみようという方と計画策定作業を進行していくうちに、計画策定の輪も広がっていったのではないかと今となっては考えている。また、事ある毎に地域に足を運び住民の方々と親睦を図るべきであったと思う。親睦を図るといっても、何気ない会話を行うのでも良い、ただ挨拶を交わすだけでも良い。その繰り返しにより住民の方々との信頼関係も築く事ができ、策定作業ももっとスムーズに行えたのではないかと考えている。

地域振興計画策定は動き始めたばかりであるが、以上の反省も踏まえ本年度も大野地区での地域振興計画策定作業を継続して行っていく。また、モデル地区である大野地区での計画作業を参考事例とし、次年度以降、順次市内他地区での計画作業を予定している。この事業において最も重要なのは、計画を作るのではなく、作った計画をいかに活用していくかということである。そのため、計画策定後のまちづくりに行政が少しでもお手伝いできるよう、地域活動への支援制度等の制度設計を並行して行う。

地域住民の方々がこの事業に取り組んで良かったと心の底から思えた時が、本市の基本理念である「市民と協働のまちづくり」「将来へ自信を持って引き継げる環境に配慮したまちづくり」「地域資源を活用したまちづくり」を真に実現できたといえる時ではないだろうか。それを目標とし今後もこの事業を行っていく。